



巻頭言

魔都上海とフランス

2018年秋に開催された「魔都の鼓動 上海現代アートシーンのダイナミズム」展は、私たちが手掛けた久しぶりの国際展で、独自企画で手掛けるものとしては、かなり大規模なものでした。上海は熊本にとって東京に行く距離とあまり変わらない、言わば近場です。そこで都市がアートによって変貌する大実験が行われているのを知るのは、私たちにあって驚きでありました。

会期中には、熊本市の交流都市であるフランスのエクスアンブローヴァンス市から使節団が来熊。10月12日の開館記念日には、セザンヌに関する記念講演会「ポール・セザンヌを知ろう！」が開かれました。講演者は、セザンヌの世界的権威ドニ・クターニユ氏であり、その論理的でわかりやすいトークは、南仏のように光が差し、印象的でした。開催中の上海展との違和感はなく、むしろセザンヌの作品が上海展に一点加わったとしても、創造的類似点と強力な存在感を示すもの、と想像させました。

ところで上海では本年も大事業が目白押しで、とりわけパリのポンピドゥー・センターと上海の西岸グループ (West Bund Group) との協力で開館する一大文化施設が興味を引きます。これは西岸グループとポンピドゥー・センターという二つの国立機関による、新しい文化事業の展開であり、考えうる最高レベルの文化交流プロジェクトの実現とされています。その事業計画によれば、ポンピドゥーの収蔵品や中国を代表する現代美術を展示、一方パリにおいては、中国の現代美術展が開催される予定です。この交流事業には、ポンピドゥー・センターが誇る専門技術、キュレーションやアートマネジメント、作品の保全や修復、そして広範な美術教育も含まれているのが興味を引きます。この躍動する都市での中仏に特化した文化交流事業が、新たな国際的な注目を浴びることとなるでしょう。

熊本市現代美術館館長 桜井武

MUSEUM INFORMATION

2018 SEP-2019 MAR

魔都の鼓動 上海現代アートシーンのダイナミズム

2018.9.22-11.25

魔都の鼓動

上海現代アートシーンのダイナミズム
急激な発展を遂げる上海の現代
アートシーンを紹介する展覧会「魔
都の鼓動 上海現代アートシーンのダ
イナミズム」を開催しました。現在
の上海のアートシーンが成立するま
でに歴史的に大きな役割を果たして



きた巨匠から新世代の若手まで、国内初紹介となる作家も含めた計13組を紹介。会場入口のジャン・ホアン〔張洵〕の《Q Confucius No.2》のような度肝を抜くスケール感の立体作品から、先端技術を駆使した新メディア作品まで、刺激に満ちた作品の数々を通して隣国のシーンの熱気をお伝えしました。(G・S)

2018.9.22

オープニング・パフォーマンス

「激烈劇場」上海諸島



上海展のオープニングイベントとして、出展作家のうちの一組「激烈空間」によるスピーチ・パフォーマンスを開催しました。激烈空間は様々な形のプロジェクトを行い、そのつどアーティストをはじめ多様な領域のメンバーが参加するというプロジェクト・プラットフォームのような存在です。今回のパフォーマンスでは、創設者の一人であるヤオ・モンシー〔姚夢溪〕が写真記録を見せながらその活動を紹介しました。(G・S)

【参加人数25人】



2018.9.22

オープニング・ アーティストトーク

上海展の2つ目のオープニングイベントとして、出展作家6名によるアーティストトークを開催しました。ダイ・ジェンヨン〔戴建勇〕による自身の家族を写し続けた《三十年、一つの家》の紹介に始まり、それぞれが自作を前にしてその背景やコンセプトを語りました。中国のインターネットの状況を扱った《Chinernet Plus》を出展したミアオ・イン〔苗穎〕はトーク後に、自身の作品の中のグレート・ファイア・ウォール〔特定のサイトや情報へのアクセスをブロックする中国特有のシステム〕を



イメージした壁に金槌で穴を開けるショート・パフォーマンスを披露し、来場者を沸かせていました。(G・S)

【参加人数25人】

2018.10.7

「上海局面」都市空間、 現代美術、観衆

上海在住のアーティスト／キュレーターのワン・イーチュエン〔王懿泉〕さんをゲストに招き、「都市空間」「現代美術」「観衆」という三つの切り口から上海の状況を紹介する講演会を開催しました。トークは上海という都市の近現代史の振り返りからスタート。その後、様々な写真を見ながら、美術館の急増といっ

た近年の上海の現代アートシーンの急発展について語っていただきました。また、施設の増加のみならず、アーティストをはじめとするクリエイターたちが活発に活動している様子も、ワンさん自身が企画したイベント「Collection of Acts」の例も交えて紹介。現代美術の観衆に関するお話では、多くの人々が展覧会で撮影した写真をSNS上で共有して楽しむ様子を紹介しつつ、一方で展覧会の多くが「映える」作品ばかりを扱うようになる可能性への危惧についても触れられました。

【参加人数25人】



開館記念日イベント

熊本市現代美術館は今年で開館から16周年を迎えました。10月12日の開館記念日には展覧会を入场無料で開放し、びぶれす広場で記念イベントを開催しました。

びぶれすでは上海展にちなみ、講演会にも登壇いただいたワン・イーチュエンさんの企画のもとで、飛び入り歓迎のストリート麻雀大会を開催。ベテランから初心者まで様々な方がふらりと参加され、満員御礼のにぎわいとなりました。また会場には中国関連の古本屋ブースや中華キオスクも出店し、道行く方々がものめずらしそうにのぞいていました。(G・S)



「怪獣人間」ワークショップ

2018.10.13

上海展出品作家のシアオ・ロンホアを講師に招き、「怪獣人間」に変身するワークショップを開催しました。怪獣の素材は、ロンホアが上海のロー



カル市場で仕入れてきた日用品および奇妙な色・形のグッズの数々。日本の特撮怪獣が大好きというロンホアの造形アドバイスを受けながら、参加者の皆さんは思い思いの素材を使って怪獣化していききました。

ワークショップ後半、怪獣人間と化した参加者の皆さんは下通商店街へ繰り出しパレードを実施。本イベントはSTREET ARTPLEXのプログラムの一つでもあり、路上ではARTPLEXの他のミュージシャンたちの演奏との即興のコラボレーションも発生。通りを歩く方々の注目を集めていました。(G・S)

【参加人数6人】

CAMKレクチャーカレッジ



上海展の企画者によるレクチャーを開催しました。初めに本展の背景として近年の上海のアートシーンの活況ぶりを紹介し、展覧会の準備のために実施した2017年夏の現地

2018.11.18

上海ビエンナーレ速報レポート

&《器世界の騎士》爆音上映会

11月10日に、アジアを代表する国際芸術祭である上海ビエンナーレ(第12回)が開幕しました。それを記念して、当館でも臨時イベントを開催しました。

はじめに、同展のオープニングに出席した学芸員からスライドを通して現地の様子の報告を行いました。

今回の上海ビエンナーレには、上海の若手作家ルー・ヤン(陸揚)が当館および日本のクリエイターたちとのコラボレーションのもと制作した作品《器世界の騎士》も出展されており、特撮ミニチュアやアーケードゲームも取り込んだそのパワフルなインスタレーションの様子に来場者の皆さん

調査の様子も一部ご覧いただきました。その後、1970年代末の改革開放以後の中国の現代美術史をダイジェストで紹介。上海展に出展しているベテラン作家については、その激動の歴史の中で果たしてきた役割を説明しました。若手作家については今回の出展作品のほか、その制作過程や過去の作品、また今回の来日時の様子なども取り上げながら、それぞれの制作テーマや関心について掘り下げました。(G・S)

【参加人数25人】

は目を丸くしていました。上海の様子を紹介した後は、当館の展覧会会場内で同作の爆音上映会を実施し、圧倒的迫力で作品をお楽しみいただきました。(G・S) 【参加人数15人】



ルー・ヤン《器世界の騎士》2018 (第12回上海ビエンナーレ会場)

ギャラリーⅢ(GⅢ)は、熊本・九州のアーティストを紹介し、応援していくスペースです

GⅢ

2018.9.22-11.25

GⅢ-Vol.125

DDプレゼンツ

中国ITと若者文化のいまーシェアサイクルからネットタレントまで

「魔都の鼓動」展の関連企画として、ギャラリーⅢでは「DDプレゼンツ 中国ITと若者文化のいま」を開催しました。本展のキュレーターはなんと、中国人バークナル YouTuberのDD君。その案内のもと、モバイル決済、シェアサイクル、ネットタレント等々、ITの発展によりこの数年で様変わりしている中国のライフスタイルやそこから生まれてきた若者文化をご紹介します。また本展にあわせて日中のDDファンからは数多くのファンアートが寄せられ、それらも会場と同時に公開されました。(G・S)



「もの派」があつて、その後のアートムーブメントはいきなり「スーパーフラット」になつちやうのだが、その間、つまりバブルの頃って、まだネーミングされてなくて、其処を「バブルラップ」って呼称するといろいろしくりくると思っています。特に陶芸の世界も合体するわかりやすいので、その辺を村上隆のコレクションを展示したりして考察します。

2018.12.15-2019.3.3

バブルラップ

世界的アーティスト・村上隆さんが、自身のコレクションをもとに企画した展覧会、「バブルラップ」を開催しました。村上さんは古今東西の驚くべき量と質のアートを収集しており、ここ数年大きな話題となつていました。本展はそのコレクションへの注目もさることながら、新たなアートのキーワード「バブルラップ」の発表という極めて話題性に富むものの。1980-90年代のいわゆる「バブル経済期」を中心とするアートムー



ブメントに「バブルラップ」という呼称を与え、日本の戦後の現代美術を捉えなおそうという意欲的な試みです。

「バブルラップ」とは、実は私たちがよく知っているあるものの名称で、俗に「プチプチ」と呼ばれる、ビニール製の気泡緩衝材のことを、英語でBubblewrapと言います。ネーミングにあたっては「バブル経済」の「バブル」にかけているわけですが、この安価でも手に入るビニール製の梱包材の名前こそが、日本の戦後の現代美術を整理して考える上では相応しい、というのが村上さんのアイデアです。会場はバブル期のアートからはじまり、「Suppattal」生活工芸「古道具」もの派と続きます。昨今、80・90年代のアートを取り上げられる展覧会が様々な美術館で開催されていますが、村上さん独自の目線で語られるの本展の構成と内容は、一石を投じるものとなりました。(M・I)

オープニングトーク



や企画の意図についてお話しいただきました。

村上さんは、「ゴッホやミレー、モネを買うほどの財力を持っていたバブル経済期に、日本人が好んだのが日比野克彦、つまり段ボールで作品を作るアーティストだった。」と指摘。そこから「日本人のアーティストはゴミみたいな段ボールを選んだ。大衆向けで貧乏でも共有できる、しかもクオリティの高いものの中に日本人の美意識がある。」と続けました。バブル経済崩壊後のアートについては、「デフレ社会の頃から生活工芸というムーブメントが現代美術とは別に出てきた。それは安くてでも生活を潤すようなものだった。」と分析。最後にもの派と古道具坂田を展示したことについては「生活工芸と貧困の中の芸術をまとめていくところが最後の部屋」とし、「清貧さ、慎ましやかさ、それが日本の美ではないか。」と述べられました。

会場には溢れるほどの来場者が集まり、質疑応答も活発に行われ、非常に充実した時間となりました。(J・I)

【参加人数 150人】

講演会 「バブルラップ」と

1980年代アート



本展の核であり、また、昨今国内で活発に取り上げられている1980年代のアートに関する議論をより深めるため、美術批評家の榎木野衣さんによる

講演会「バブルラップ」と1980年代アートを開催しました。「渋谷」「バルコ」「広告」をキーワードとして軸に据え、「アール・ポップ」「ニュー・ベインティング」「日本グラフィック展」「超少女」「ポストもの派から「絵画/日本」の5項目について掘り下げていく構成。展覧会とはまた異なる視点で80年代アートを見つめる機会となり、知的刺激に満ちた講演会でした。(J・I)

【参加人数 90人】

2019.3.2-3.3

クロージング連続トークショー Vol.1 「80年代から見たバブルラップ」

Vol.2 「古道具坂田の意義、生活工芸との距離」

「バブルラップ」展のクロージングイベントとして、連続トークショーを2日間開催しました。1日目は「80年代から見たバブルラップ」というタイトルで編集者、美術ジャーナ



リストの鈴木芳雄さんと、2日目は「古道具坂田の意義、生活工芸との距離」というタイトルで「工芸青花」編集長の菅野康晴さんと、本展キュレーターでありアーティストの村上隆さんが対談しました。「バブルラップ」について世界的な視点から語られたほか、本展の大きな特徴の一つでもある「生活工芸」や「古道具」を展示したことについても掘り下げたお話しがあり、展覧会の理解と解釈をより深めることのできる時間となりました。(J・I) 【参加人数各100人】



Project H

いろんなじじょう

9色のデザイン展

九州各県で活躍するグラフィック・デザイナーによるユニットProject H（プロジェクト・アッシュ）による展示を開催しました。岡崎友則、河野靖弘（北九州）、春高壽人、宮崎智文（福岡）、中村圭太（長崎）、井下悠（大分）、杉村武則（熊本）、富永功太郎（鹿児島）に、ゲストとしてワビサビ（札幌）の9組が各自の「色」を担当して、ポスター、タペストリー、立体、映像、ファッションなどへと展開。12月1日（土）にはギャラリートークも行われ、盛況をみせました。（A・S）



2018.10.20-11.25

熊本市現代美術館 生人形コレクション

「昔はアメリカにいました、今は熊本です」

同時開催

「ハワイ日系人の歩み展」

生人形コレクション「昔はアメリカにいました、今は熊本です」展を開催しました。当館は、開館当初より生人形の研究を進め、現在ではデトロイト美術研究所より里帰りの安本亀八《相撲生人形》をはじめ、優れた生人形作品をコレクションしております。近年収蔵した作品に、アメリカの天才子役シャリー・テンプル旧蔵の作者不明《花嫁生人形》があります。この作品は、1935年にハワイのホノルルにて、ハワイ日系人によりシャリー・テンプルにプレゼントされたものです。なぜ、どうして「花嫁」なのかは、収蔵し



てより謎のひとつでした。

今回同時開催した「ハワイ日系人の歩み展」を通じて、ハワイ日系人の歴史を深く学ぶ機会となったのですが、同時に《花嫁生人形》をプレゼントした人物の遺族に残る言い伝えなどを調査することができ、この作品について新たな情報を得る機会ともなりました。引き続き作品調査を続けていきたいと思います。

《相撲生人形》については、当館の布絵本ボランティア作成による、野見宿禰の復元衣装、上下揃ってのお披露目の機会ともなりました。（H・T）

2018.10.20

「ハワイ日系人の歩み展」関連イベントとして、熊本上通のフラスタジオ、ナレイオホクのメンバーによるフラダンスショーを開催しました。カラフルで美しい衣装を纏い登場したフラスタジオのみさん。オーピングはカヒコという古典フラを踊っていただきました。ハワイでは儀式として最初に踊るものだそうです。ひょうたん楽器のイブが奏でる音色にあわせ、ゆったりと踊るその姿からは、南国の風や花、太陽の暖かな光を感じます。自然を愛したり、愛しい人をおもったり、表情豊かなフ

「ハワイ日系人の歩み展」関連イベント

フラダンスショー①

「ハワイ日系人の歩み展」関連イベントとして、熊本上通のフラスタジオ、ナレイオホクのメンバーによるフラダンスショーを開催しました。カラフルで美しい衣装を纏い登場したフラスタジオのみさん。オーピングはカヒコという古典フラを踊っていただきました。ハワイでは儀式として最初に踊るものだそうです。ひょうたん楽器のイブが奏でる音色にあわせ、ゆったりと踊るその姿からは、南国の風や花、太陽の暖かな光を感じます。自然を愛したり、愛しい人をおもったり、表情豊かなフ

ラダンス。

全部で4曲踊っていただき、1曲ごとに変化する衣装にも目が奪われていきました。最後は「アロハ」の掛け声で幕を閉じたフラダンスショー。大勢の方が鮮やかで暖かな世界観を堪能されていました。（J・I）



【参加人数60人】

2018.11.17

「ハワイ日系人の歩み展」関連イベント

フラダンスショー②



ナレイオホクのメンバーによる第二回目のフラダンスショーを行いました。今回は、Molokai Jam（モロカイジャム）、Pua Hinano（プアヒナノ）、Aia I Olaia Kuiu Aloha（アイイオラアタラアロハ）、Hawaiian Paradise（ハワイアン・パラダイス）の4曲の公演でした。特に3曲目では切ない恋心が美しいモーショで表現されています。フラダンスの多様な魅力を感じさせるひと時でした。（H・T）

【参加人数60人】

「ハワイ日系人の歩み展」記念トーク

2018.11.17



在福岡米国領事館、首席領事のジョイ・未知子・サクライさんの記念トークを開催しました。まずは、ハワイ日系人の草創期の歴史からスライドショーで紹介いただき、ハワイ日系人としてアメリカの政治に影響を与えたダニエル・井上、パツィー・ミンクの業績や、現在の、特に九州にルーツのある日系人の活躍などもお話いただきました。

トークの最後には、熊本地震の折にアメリカ大使館・領事館が作成した、熊本への復興応援ムービー「熊本・アメリカ協働プロジェクト」くまもとサブライズ！」（米空軍音楽隊カパーバジョン）を上映いただきました。編曲センスの良さと、出演者ひとりひとりの真心が伝わる内容でした（もちろんサクライ首席領事も登場）。（H・T）

【参加人数60人】

2018.10.13

STREET ART-PLEX KUMAMOTO

Great Composer

Memorial Series

フレデリック・ショパン

フレデリック・ショパンを愛する6名のピアニストたちによる、メモリアルコンサートを開催しました。ピアノの詩人と称され、39歳で亡くなったショパンとその楽曲への想いを語りながら、「ポロネーズ 第11番 短調(遺作)」、「ワルツ第7番嬰ハ短調 作品64・2」などが演奏されました。熊本在住の若手演奏家を中心に、ゲスト演奏には古澤歌歩子さんをお招きしました。古澤さんの思い入れのある「ノクターン 第2番 変ホ長調 作品9」をはじめ、「幻想即興曲 嬰ハ短調 作品66」などの名曲を披露。「別れの曲」として多くの人に愛されている「エチュード 第3番 ホ長調 作品10」は、お客様もその音色に惚れ惚れとしていらつしやいました。(Y・M) 【参加人数 100人】



2018.10.13

STREET ART-PLEX KUMAMOTO

EXTRAVAGANZA

2018~Harmonious

Passage

「EXTRAVAGANZA」が今年も

開催されました。現代美術館会場では、3組のアーティストが出演。1組目「アマゾネス」は箏とピアノ奏者によるデュオ。25弦と88鍵の共演は、時にぶつかり合いながらも融合したメロディを紡いでいきます。初めの一音から、揺らぎ、混ざり合う音に、アマゾネスのつくる現代音楽



の世界に引き込まれました。続いて、

2組目の「デュオ・トゥシヤン」はヴィオラとピアノ奏者の男女のペアです。ブラームス、レベッカ・クラークのヴィオラソナタなど、深く伸びやかなヴィオラの音に綺麗なピアノの旋律が合わさっていました。3組目は、ソプラノ歌手の小林沙羅さん。ピアノの伴奏に、明るく響く小林さんの歌声は、聴く人の心に花を添えるかのように優しく、生き生きと伝わっていきました。3組の表現する音の世界を存分に楽しんでいただきました。(Y・M)

【参加人数 130人】



共催イベント

2018.10.12

開館記念日特別講演会

「ポール・セザンヌを知ろう！」

日仏交流

160周年を迎えた2018年、熊本市とフランスのエクスプロヴァンス市の「交流都市協定」も締結から5周年となりました。そこで今年の熊本市現代美術館の開館記念日は、生涯の大半をエクサンプロヴァンスで過ごした



画家、ポール・セザンヌについての特別講演会を開催しました。講師は、

セザンヌ研究の第一人者であるドニ・クターニユ氏。エクスにあるグラネ美術館の元館長で、「セザンヌ友の会」の会長も務めている方です。講演会では、セザンヌの作品から「家」「木」「山」という3つのテーマについて語られました。エクスという土地に由来したモチーフを取り上げた内容だったので、スライドを見ているとまるでエクスの街を散歩しているかのよう。最後はセザンヌから影響を受けた後世の画家、カンディンスキー、マティス、ピカソ、マレーヴィチ、モンドリアンの作品についてもお話がありました。(Mi・I) 【参加人数 120人】

2018.12.21

CAMKX

Hardcore Ambience

音楽家 Koji Nakamura のアンビエ

ントプロジェクト Nyanora (ニャントラ) と福岡のエレクトロニクス・コンポーザー duenn (デュエン) によるユニット Hardcore Ambience の公演を開催しました。薄明かりに、ホームギャラリーのジュームズ・タレルの作品《MILK RUN SKY 2002》が青く照らす中での演奏でした。始まりは緊張感も感じるような静かな空間に、様々な電子音やノイズが鳴り、溶け込むようなリズムを刻んでいました。穏やかに変化していく2人の音楽に、お客様も心地よく浸っておられ、いつまでも音楽を聴いていたくなる素敵なお時間でした。(Y・M) 【参加人数 47人】



表紙のジャン・ホアンの
巨大作品のモチーフ、
実は孔子さまなのです…!



編集後記

上海展は私の企画でした。アジア圏の現代美術の展示会はなかなか来場者が伸びないことも多いのですが、今回は1万人の大会を超えることができ非常にうれしかったです。オープニングやイベントの際には何人もの作家や関係者が来熊しましたが、彼らも空き時間には商店街のまち歩きを楽しんだり、蕎麦屋のウェストで飲み会をしたり、熊本の特撮ファンたちと交流したりと、それぞれに楽しんでいました。写真家のダイ・ジェンヨンは熊本でも写真を撮りまく、「無料案内所っておもしろいな」と言っていました…。本展をきっかけに、今後も活発な交流を続けていければと思います。

編集長 佐々木玄太郎

昨年の9月から11月に開催された「魔都の鼓動 上海現代アートシーンのダイナミズム」展。上海という都市の異国情緒を感じることで作品が数多くあり、中には日本の文化とも通ずるような作品もいくつかありました。文化が違えば、アートの形も多種多様なものがあったり、また、時には同じような形になることもあるのだと、とても面白かったです。当館にも、海外からの観光客の方が展示会を覗いて足を運んでくださることもあります。多種多様なテーマの展示会を覗いて何を感じ、何を思ったのか、これからは様々な形をしたアートに触れて、国の垣根を越えて心に響くものを感じていただけたら幸いです。

担当 紫垣美帆

【執筆者一覧】*原稿の文末にイニシャル表記
富澤治子 (H・T) [熊本市現代美術館主査・学芸員]
坂本顕子 (A・S) [熊本市現代美術館主査・学芸員]
佐々木玄太郎 (G・S) [熊本市現代美術館学芸員]
池澤茉莉 (M・I) [熊本市現代美術館学芸員]
岩崎美千子 (Mi・I) [熊本市現代美術館学芸員]
丸吉ゆかり (Y・M) [熊本市現代美術館学芸アシスタント]
市下純子 (J・I) [熊本市現代美術館学芸アシスタント]

ART KISS LETTER アート・キッスレター
vol.88-89 春号 (2019年4月) 【無料】

発行人: 桜井武
編集: 佐々木玄太郎 紫垣美帆
デザイン: 石井克昌 (MOTOSHIKI)
印刷: シモダ印刷
発行: 熊本市現代美術館 www.camk.jp
〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3
電話 096-278-7500 FAX 096-359-7892

月曜ロードショー上映報告 上映リスト (9/10) (10/1) (11/13)

9月10日 『美しい夏キリシマ』 2003年 日本 118分 黒木和雄監督
9月17日 『僕は歩く、ただそれだけ』 2009年 日本 73分 廣木隆一監督
9月24日 『僕たちの家に帰ろう』 2014年 中国 103分 リー・ルイジュン監督
くまもとフレンチウィーク2018

【特集】パリだけじゃない! フランス映画

10月1日 『木と市長と文化会館』 1993年 フランス 105分 エリック・ロメール監督
10月8日 『五月のミル』 1990年 フランス・イタリア 107分 ルイ・マル監督
10月15日 『幸福』 1965年 フランス 80分 アニエス・ヴァルダ監督
10月22日 『今日から始まる』 1999年 フランス 118分 ベルトラン・タヴェルニエ監督
10月29日 『悲恋』 1943年 フランス 112分 ジャン・ドラノフ監督

11月5日 『THX 1138』 1971年 アメリカ 86分 ジョージ・ルーカス監督

11月12日 『エレクトロニック・スーパーハイウェイ』 90年代のナムジン・パイク

1995年 アメリカ 40分 ジャド・ヤルカット監督

11月19日 『dumb type / OR』 1998年 日本 68分 高谷史郎監督

11月26日 『タイム・オブ・ザ・ウォルフ』

2003年 フランス・オーストラリア・ドイツ 108分 ミヒヤエル・ハネケ監督

12月3日 『バットマン』 1989年 アメリカ 127分 ティム・バートン監督

12月10日 『ピロスマニ』 1969年 グルジア 86分 ゲオルギー・シャンゲラヤ監督

12月17日 『三文役者』 2000年 日本 126分 新藤兼人監督

12月24日 『悲情城市』 1989年 台湾 159分 侯孝賢監督

2019年

1月7日 『不滅の恋 ベートーヴェン』

1994年 イギリス・アメリカ 121分 パーナード・ローズ監督

アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します

Visitor's letter

魔都の鼓動

上海現代アートシーンのダイナミズム

- 事前に予想していたより遥かに面白かったです。入口近くの孔子の像の迫りに圧倒され、現代的な映像表現のポップさに驚き、大変満足です。企画して下さった方に「感謝」です。
- ユニークで良い! 何度も足を運びたくなくなってしまいました。
- 上海の美術に対する関心を見ることができてとても魅力的だった。日本とは違う着眼点、思考を少しですが感じられて嬉しく思う。
- 爆音上映会に参加し、とても面白かった。

バブルラップ

「もの派」があって、その後のアートムーブメントはいきなり「スーパーフラット」になっちゃうのだが、その間、つまりバブルの頃って、まだネーミングされてなくて、其処を「バブルラップ」っ

て呼称するといろいろしくりくると思います。特に陶芸の世界も合体するとわかりやすいので、その辺を村上隆のコレクションを展示したりして考察します。

- タイトルやパンフの説明文から素人には近寄りた雰囲気があったのですが、とにかく面白かったです。陶芸の部屋は圧巻。たくさん顔が並べられたエリアは立ち去り難く、何往復もしてしまいました。
- バブル後の、まさに自分が生まれてからのアートの流れや雰囲気を知れてよかったです。
- 1つ1つの作品が工夫されていて、インパクトがあり印象に残るものが多くあった。
- それぞれの展示室で雰囲気が違うところが素敵でした。特に陶器を展示してあったところが好きでした。写真撮影が可能な部分はスタッフさんがそのつど案内して下さったのでわかりやすかったです。

【AKLリニューアルのお知らせ】

いつも ART KISS LETTER をご愛読いただきありがとうございます。AKL は美術館活動の報告記事を主としたフリーペーパーとして発行を続けてきましたが、次回号よりコンテンツを一新してリニューアルいたします。次号からは、主に開催中の展示会に関連する各種情報を掲載し、毎回の展示会をより深くお楽しみいただく助けとなる媒体を目指してまいります。この88-89号の後、しばしのリニューアル準備期間を挟み、次回は2019年6月の発行を予定しております。リニューアル後のAKLにもどうぞご期待ください。

日比野克彦 公開制作

「DEPARTMENT」

「STREET PAINTING」

展覧会のオープンを記念し、本展出品作家の日比野克彦さんによるライブペイントが熊本パルコ下通側店頭で行われました。

支持体の布を下ろし、最上部から筆が入り始めます。バケツを片手に大胆に色をのせていく日比野さん。青空と木が現れ、動物たちが現れ、徐々に全体像が見えてきます。鳥、兎、象、そして猿が1匹ずつ登場。そして、画面左側には「HAPPY」の文字



も。できあがったのは動物たちが力を合わせて赤い実を取ろうとしている絵。完成時には開始時よりも大勢の方がライブペイントを見学されており、最後は全員で日比野さんに大きな拍手をお送りしました。

絵の題材はプータンの民話。民話の中では猿も他の動物たちと協力して赤い木の実を取るのだ



そうですが、この絵では猿だけ離れた場所に立っています。この猿は人間になぞらえられており、「最近の世界を見ると、人間は協力することを忘れていっているのではないか」という意味が込められているとのこと。「HAPPY」という文字については、「この作品を通して幸せについて考えてもらえたら」と日比野さん。3時間間で仕上げられた高さ約5m、幅約3mという驚きの大作は、パルコ下通側店頭で12月16日から1月8日まで掲出されました。(J・I)

「大谷工作室と

みんなの工作室@熊本」

本展出品作家の大谷工作室さんによるワークシヨップ、「大谷工作室とみんなの工作室@熊本」を開催しました。本展の見どころの一つである陶芸に触れることを目的とし、「自分の顔、身近な人の顔、あこがれの人の顔。『誰かの顔』を粘土で作ってみよう!」というテーマのもと、おもしろい制作。大谷さんは参加者のみなさんの「こういう顔を作りたい!」という気持ちに寄り添いながらアドバイスをされ、その気さくで優しい声かけに緊張もどんどんほぐれ、皆さんのびのびと作品作りをされていました。



子供の顔、お母さん・お父さんの顔、理想の自分の顔、動物の顔……いろいろな顔ができあがり、最後は自分以外の人の作った作品を見て回るとに。1時間半の間、参加者の皆さんは自分の作品作りに没頭されていたので、他の方の作品に触れるこ



とはとても面白い経験になったそうです。大谷さんに講評もしていただけました。(J・I) 【参加人数17人】

くまもと詩の朗読の会共催の自作の詩の朗読会

詩の朗読会

- 9.15 第176回「上海」【参加人数12人】
- 10.25 第177回「世界」【参加人数12人】
- 11.22 第178回「龍」【参加人数11人】
- 12.21 第179回「誕生」【参加人数13人】



当館ボランティアによる子ども向け読みきかせ

CAMK読みがたり

- 9.15 第108回「ぐららば・ぐららま」【参加人数26人】
- 10.20 第109回「ハロウィンがやってきた」【参加人数14人】
- 11.17 第110回「おいしいね」【参加人数13人】
- 12.22 第111回「クリスマス」【参加人数14人】



親子向けの各種ワークショップ

街なか子育てひろば

- 9.20 わいわいランド「親子でわくわくリトミック」
- 10.18 今田淳子「親子でアートを楽しもう」
- 11.19 グルンダー・ハーマン「英語で遊ぼう!ABC」
- 12.20 萩野 厚子「親子で楽しむフラワーアレンジメント」

